

岩手県における小麦新品種「ネバリゴシ」の目標生育量と栽培法

荻内 謙吾・高橋 昭喜*

(岩手県農業研究センター・*岩手県農業研究センター県北農業研究所)

Suitable Growth and Cultivation Method of a New Wheat Variety "Nebarigoshi" in Iwate Prefecture

Kengo OGIUCHI and Akiyoshi TAKAHASHI*

Iwate Agricultural Research Center・

[Iwate Agricultural Research Center, Kenpoku Agricultural Institute]

1 はじめに

小麦新品種「ネバリゴシ」は2001年に岩手県の奨励品種に編入され、2002年産の作付けは60haとなっている。「ネバリゴシ」は、低アミロース含量で製めん適性が高く、食感の粘弾性、なめらかさが優れ、食味にも優れる。そこで、めん用新品種として計画的な定着・普及を図るため、「ネバリゴシ」の目標生育量及び栽培法について検討した。

2 試験方法

- (1) 試験年次 1997～2000年
- (2) 供試品種 「ネバリゴシ」
- (3) 播種期 標播：10月4～7日
晩播：10月19日
- (4) 播種様式 条間30cm、密条播
- (5) 播種量 4、6、8、10、12、16
(kg/10a)
- (6) 施肥量 基肥：N-P-K=4.0～6.0-13.5-10.0
(kg/10a) 追肥：融雪期、減数分裂期、出穂期に
0、2、4を組み合わせて実施

3 試験結果及び考察

(1) 目標生育量

穂数と子実収量との間には高い正の相関がみられた(図1)。穂数が650本/㎡を越えると倒伏程度が増すこと、また、穂数450本/㎡以下では子実収量が極端に低下する場合があることから、目標とする穂数の範囲は450～600本/㎡(平均で530本/㎡)が妥当と考えられた。この時の子実収量は480～600kg/10a、平均で540kg/10aとなる。

穂数と稈長、穂数と千粒重の関係(図2)から、目標穂数450～600本/㎡に対応する稈長は77～85cm、千粒重は35～38gであり、これらの値を成熟期の目標生育量とした。

(2) 栽培法

図3に示すように、晩播では標播に比較して穂数が少なくなり、子実収量が低くなる傾向がみられた。また、播種量の増加や減数分裂期・出穂期の後期追肥により子

実収量は増加したが、標播に比べると100kg/10a前後も低収であった。したがって、播種時期は慣行どおりの標播とすることが望ましいと考えられた。

播種量と生育量の関係をみると、播種量10kg/10aまでは播種量の増加に伴い穂数は増加したが、それ以上では頭打ちとなり倒伏もみられた。また、播種量が増えると千粒重が減少し、子実収量は低下する傾向がみられた。子実収量は播種量6kg/10aで最も高く、播種量8kg/10aがこれに次いだ(図4)。

播種量8kg/10aでは、融雪期追肥を2kg/10aから4kg/10aへと増量することにより穂数は増加するが、倒伏程度が増すことから、追肥量の極端な増加は好ましくないと考えられた(表1)。

窒素追肥時期と子実収量及び粉の蛋白含量との関係についてみると(図5)、播種量6kg/10a、8kg/10aとも子実収量は融雪期+減数分裂期の追肥で最も高かったが、融雪期+出穂期追肥との差は10%以下と小さかった。また、どちらの播種量でも融雪期追肥のみでは粉の蛋白含量は低く、融雪期に加えて減数分裂期または出穂期の追肥で適正な蛋白含量が維持された。

以上の結果から、収量性や倒伏程度、粉の蛋白含量を考慮して、播種量は6kg/10aを基本とするが、出芽の不安定な場所では8kg/10aを上限として播種量を増やすこと、追肥量は窒素成分で融雪期に2kg/10a、減数分裂期から出穂期にかけて2kg/10aを施用すること、が妥当と考えられた。

4 まとめ

倒伏を避け、安定多収を確保するための穂数は平均で530本/㎡程度であり、この場合の子実収量は540kg/10aである。播種量は6kg/10aを基本として適期に播種し、窒素追肥を融雪期に2kg/10a、減数分裂期から出穂期にかけて2kg/10a施用することで適正な粉の蛋白含量が確保されることが明らかとなった。

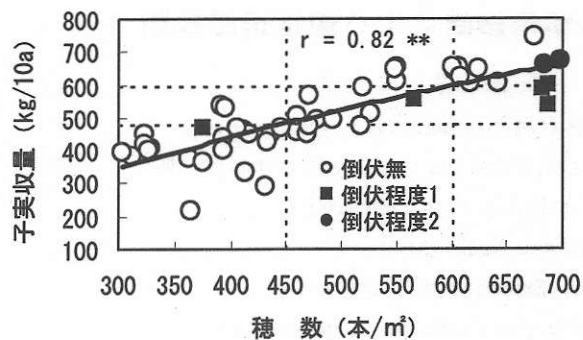


図1 穂数と子実収量の関係
注. ----- の範囲内が目標生育量を示す。

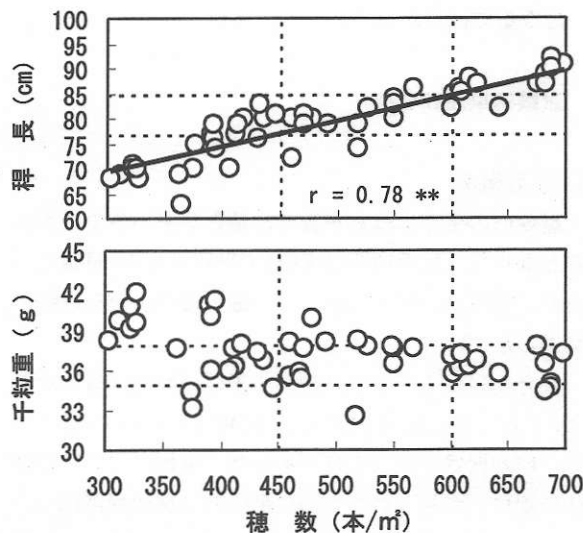


図2 穂数と稈長及び千粒重の関係
注. ----- の範囲内が目標生育量を示す。

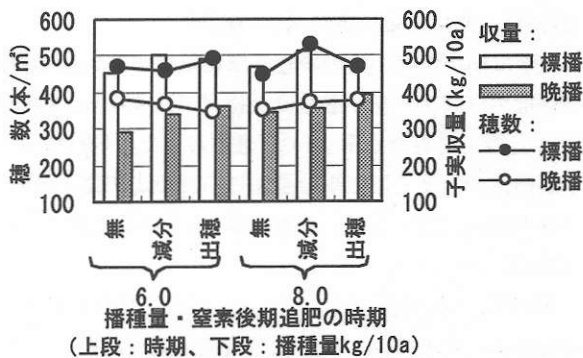


図3 播種時期による子実収量・穂数の比較
注. 各区とも基肥4kg、融雪期2kg/10aを窒素成分で施用。後期追肥の量は減分分裂期（減分）、出穂期（出穂）とも窒素成分で2kg/10a。

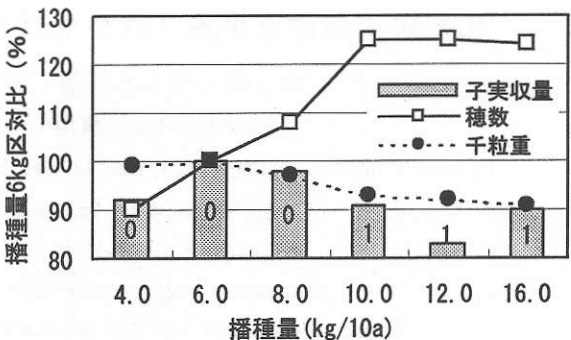


図4 播種量の違いによる子実収量・穂数・千粒重の比較
注. 棒グラフ中の数値は倒伏程度（0（無）～5（甚））
窒素施肥は、基肥4kg、融雪期2kg、減分分裂期2kg/10aを成分で施用。

表1 播種量と追肥時期・量の違いによる穂数・倒伏程度の比較

播種量 kg/10a	追肥時期別 窒素施用量	穂数 本/m²	倒伏 程度 0-5
	融雪-減分-出穂 kg/10a		
6.0	2.0-0.0-0.0	550	0
6.0	2.0-2.0-0.0	550	0
6.0	2.0-0.0-2.0	549	0
8.0	2.0-0.0-0.0	602	0
8.0	2.0-2.0-0.0	607	0
8.0	2.0-0.0-2.0	617	0
8.0	2.0-4.0-0.0	601	0
8.0	2.0-2.0-2.0	624	0
8.0	2.0-0.0-4.0	609	0
8.0	4.0-4.0-0.0	683	2
8.0	4.0-0.0-4.0	698	2
10.0	2.0-2.0-0.0	688	1
12.0	2.0-2.0-0.0	687	1
16.0	2.0-2.0-0.0	682	1

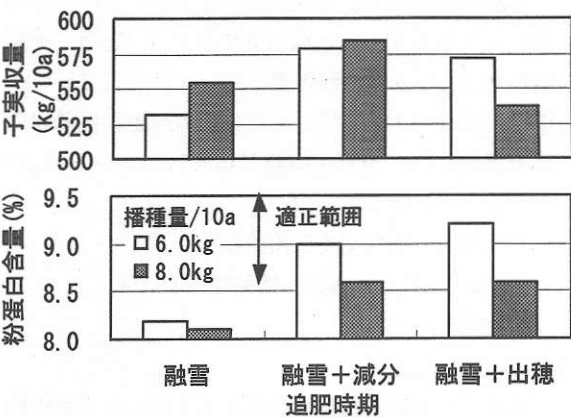


図5 窒素追肥時期による子実収量・粉蛋白含量の比較
注. 各区とも基肥窒素は成分で4kg/10a、追肥窒素は2kg/10a。